



「福音の喜び」

独立自主管理労働組合「連帯」のレフ・ワレサを資金面で支援し、東側諸国の共産主義を瓦解させたのは、ロナルド・レーガノミクス。レーガン大統領とポーランド

る回勅「レールム・ノヴァルム」を發布。作成に参与した経済学者の畏兄・宇沢弘文氏は述べ懐します。それは「社会主義の弊害と資本主義の幻想」を主旋律とし、資本主義と社会主義の二つの経済体制を超えて、人間的尊厳と魂の自立、人々の基本的権利が確保される経済体制を希求・実現せよとの問題提起だったと。

即ち早晩、公益≡国民益を忘れた米国型の株主資本主義、中国型の国家資本主義が齎す課題を、精力的に世界各国を訪問し、「空飛ぶ聖座」と呼ばれた教皇は逸早く預言していたのです。

二二年後の昨年十一月二六日、第二六六代ローマ教皇フランシスコは自ら筆を執って二八八節に及ぶ使徒的勧告「福音の喜び」エヴァンジェリイ・ガウディウムを發布します。

「日本の針路はどこに向いているのか。我等の漠たる不安に百人の叡知が答える」と銘打って「文藝春秋」六月号が特集した「安倍総理の『保守』を問う」で、僕はその一節を引用し、これぞ「市場万能主義」私益資本主義への容赦なき警告だと述べました。

出身ヨハネ・パウロ二世の「闘」の為せる技でした。そのヨハネ・パウロ二世は東西ドイツ統一翌年の一九九一年、「新しい事」をラテン語で意味す

「多くの人々は貢献すべき仕事を得られず、挑戦すべき機会も与えられず、その状態から抜け出る事さえ叶わぬ中で排除され・疎外され、「人間もその存在自体、使用後には即廃棄に至る消費財と見なされている。斯くなる、使い捨て、文化を我々は生み出し、而も急速に蔓延している」。

が、日本カトリック司教協議会は既に半年が経過した五月末に至っても邦訳を發表していません。故にその訳文は僕の拙訳。加えて日本の新聞各紙は終始一貫、黙殺と呼ぶべき対応なのです。

カトリック信者は国民の五人に一人に過ぎず、富める者が更に富めば、貧しき者にも富が滲透すると唱えたレーガノミクスに象徴される新自由主義のトリクルダウン理論を編み出したアメリカでの反応とは極めて対照的です。

「ワシントン・ポスト」は即日、「教皇フランシスコ トリクルダウン経済」を批判」と題し、「拡がる貧富の格差と市場経済の行き過ぎを厳しく指弾」と一面で報道。経済紙の「ウォール・ストリート・ジャーナル」も「教会は弱者救済をローマ教皇、経済的不平

等を批判」と題し、「汝、殺すなかれ」の戒律が人間生活の価値を守る上での明確な制限を課しているのと同じく、我々は今日、排除と不正な経済に「汝、向かうなかれ」と言わねばならぬ」との一節を長尺記事で紹介しました。

資本が自由に国境を超え、事業展開する国家で税金を支払わぬ多国籍改め無国籍なモンスタ企業家が、ウェストフアリア条約以来の国民国家≡ネイション・ステートよりも上位に立って消費者≡国民を差配し、社会や家族の人間関係や文化・伝統という「市場では数値に換算出来ない物」は価値ゼロだと捉える金融資本主義への異議申し立てに、米国を代表するメディアは敏感に反応したのです。

遡って一九八三年、文化功労者に選ばれた宇沢氏が宮中で昭和天皇に、新古典派経済学がケインズが市場原理主義が社会的共通資本がと縷々進講するや途中で、「君！君は経済、経済と言うけど、人間の心が大事だと言いたいのだね」と仰った逸話を想起しました。が、果たして昨今、日本の政官財学報は、その「福音の喜び」との通奏低音を理解し得るでしょうか？

★次号7月号の発行日は6月27日(第4金曜日)です。